

柳田國男
大間知篤三
共著

婚姻習俗語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジウムが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものでもあった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめていることに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髓に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

序

この事業の着手は、昭和三年の春であつた。自分は史學會の例會に出て行つて、我々の方法の可能性と必要とを説く爲に、例證を我邦婚姻習俗の變遷に求めようとした。此方法に依るに非ずんば、現在各地の慣行の異同が、全く解説し得ぬであらうのみならず、以前明白に我々の間に在つた事實が、如何なる經過を取つて改まり動いたかの、歴史をすらも明かにし得ず、従つて新たにこの二種の知識を以て、將來の計畫の參考とするには、民間傳承の學に信賴するの他無きことを述べて、先づ大體の承認を得たのであつた。其講演の全文は殆ど原形のまゝで印刷せられて居る。翌年十月に世に出た故三宅博士古稀記念論文集に、聲入考と題して載録せられて居るものが即ち是であるが、案外にまだ多數の目には觸れて居らぬやうである。當時私が此意見の論據として、使用した國中の事實は、實を言ふとまだ本編に採録して居るものゝ四分の一にも充たず、

しかも多くは又聴きの、精確を保し難い筆者の手を経て居た。そればかりの資料を基礎として、たとへ斷定はしなかつた迄も、あれだけの主張を試みたのは大膽に過ぎて居た。全く採集の無い幾つかの地域にも、ほゞ比隣の又は同じやうな環境をもつ土地と、似たる風習が有るものと推測して見たり、或は證據のまだ得られない端々の問題に就いて、多分は斯うであらうといふ想像を逞しうした部分もある。幸ひにして後日の反證によつて、訂正し又自責しなければならぬ點は無いやうだつたが、あの時もしこの事實を知つて居たら、もつと明晰に話することが出来たのにと、思ふやうなことは無數にあつた。私たちの仲間では、斯ういふのを未熟の果實をもぐと呼んで居るが、とにかくに發表と調査と、順序が全く逆であつたことを、認めざるを得ないのである。

しかし誰にも恐らく經驗が有る様に、斯んな不安な講演をした御蔭に、急に婚姻の習俗に關する私の注意は鋭敏になつた。さうして又興味も深くなつた。世上にはまだ何程も、大切な資料が落ちこぼれて居たのである。『旅と傳説』はこの熱心に動かされて、昭和八年には婚姻習俗の特輯號を出してくれ、全國の

意外な隅々から、詳しく其地の現状が報ぜられた。一方私個人の手で、三四年の間に拾ひ集めた郡誌方言集類の、信じてよい資料もよほど集まり、同じく八年の初頭に『人情地理』と題する三號雜誌に、之を整理分類して掲載し始めた頃には、もう既に本編の資料のほゞ四分の三ほどが、私のカードには入つて居たのである。雜誌の潰れたのは今から見ると損失では無かつた。もし續いて居たならば、あの程度の常民婚姻資料を以て満足して、私はもう外の興味へ轉じて居たかも知れなかつたのである。

大間知篤三君の協同は、この際に在つて非常に有效なものであつた。事實私の根氣ははや可なり衰へて居た。同君は之に反して、新たに是等若干の印刷物を精讀して、發案者以上に此事業のプランに通曉し、それから更に進んで有る限りの私の蓄積を寫し取り、是を系統立て、一卷の語彙に、組立てる役目を引取つてくれたのである。この提携以來又既に三年餘りになる。資料のそれからの追加は、大部分が大間知君の勞苦であつた。是を一々消化して適切なる個所に利用したのも同君の判斷である。兩者の分擔を明かにすれば大體右の通りで

あるが、自分は最初の立案者として、又大間知君の自由手腕の信賴者として、總括的に責任を負うて居ることは勿論である。たゞ無爲にして人の功を奪はんとする者でないことを證明したい餘りに、是をほゞ完成に近い一卷の書に纏め上げた人の誠實と苦心とを、小さく評價し過ぎることを懼れて居る者である。

是は少しく身邊の私事に涉るが、自分の家には成長した子女が數名ある。それが聳入考出現の頃から、ぼつ／＼と縁に就いて半以上安住の地を得て居るが、親として此間に苦慮し決斷しなければならぬ大小の問題が無數にあつた。それに對しての最も力強い助言者は、ちやうど折よく手を著けて居た、前代文化史の此部面の知識だつたのである。學問は生活の實際上の要求に役立たぬ様では、始める甲斐が無いとまで思つて居る自分には、少なくともこの範圍に於ては言行の一致を見たのである。日本民俗學の必要と可能性が、やゝ過分にまで適切に立證せられたのである。嬉しいことには相異ないが、其代りには學問の動機 of 卑近さを、見縊られる懸念も無しとしなかつた。ところが大間知君の場合は全然別であつた。満足すべき婚姻生活は既に開始し、家にはまだ呱呱の聲が無

い。乃ち第一の問題は夙に立派に解決し了り、第二の問題はまだ遠く地平線上に在るのである。その中道に在つて人の爲、又弘く人世の爲に、欠くべからざる参考資料を明確に整理し、出来るだけ容易に利用せしめんとするのである。たとへ分擔の量目は均等だとしても、之を提供しようといふ素志に至つては、著しい價値の差を認めざるを得ない。さうして之を正直に告白することが、亦協同者の義務であると思ふ。

昭和十二年一月

柳 田 國 男 識

本書の編輯と出版に就いては、
財団法人啓明會の補助を得た。
銘記して感謝の意を表する。

表 字 略 名 書 用 引

- (郷) 雜誌「郷土研究」
- (民) 同「民族」
- (民學) 同「民俗學」
- (民歷) 同「民族と歴史」
- (民事) 昭和七年白東社版「日本民事慣例類集」
- (人) 雜誌「東京人類學雜誌」及び「人類學雜誌」
- (方) 同「方言」
- (風) 同「風俗畫報」
- (旅) 同「旅と傳説」
- (婚) 同誌第六卷一號「婚姻習俗號」
- (産) 同誌第六卷七號「誕生と葬禮號」
- (盆) 同誌第七卷七號「盆行事號」
- (郡誌)、(町史)、(村誌)等は、其本文中の郡名、町名、村名を省略したるものである。

婚姻習俗語彙目次

序	文	一
---	---	---

(引用書名略字表)	一〇
-----------	----

一、嫁入の起り	一
---------	---

二、嫁の盛装する日	七
-----------	---

三、迎へ人	三
-------	---

四、嫁渡し	九
-------	---

五、嫁入行列	七
--------	---

六、入家式	五
-------	---

七、中宿	四
------	---

八、花嫁同行者	四
---------	---

九、朝掣入	五
-------	---

一〇、	掣通がしと膝直し	充
一一、	打明け	七
一二、	結納掣	八
一三、	手締めの酒	九
一四、	見合ひ	一〇
一五、	歸り掣	一六
一六、	仲人親	一七
一七、	嫁の食物	一八
一八、	水盛と酒盛	一九
一九、	村人の承認	二〇
二〇、	若者酒	二一
二一、	掣いちめ	二二
二二、	部屋の生活	二三
二三、	親類成り	二四
二四、	嫁と其親里	二五

二五、嫁の産屋	三三
二六、杓子渡し	三八
二七、出入初め	三七
二八、嫁もそひ	三八
二九、宿の生活	三七
三〇、嫁入前の妻	三七
三一、私生兒	三〇
三二、獨身女の境涯	三九
三三、自由なる女性	三五
三四、絶縁	三〇四
三五、所屬未定	三九
索引	三三

一、嫁入の起り

始めてヨメイリといふ語の日本の記録に見えて居るのは、源平時代よりも尙少し前のことであつた。しかし是だけでは嫁入が今日の如く、結婚即ち夫婦生活の開始を意味して居たかどうかは確かめられぬ。といふよりも却つて外に住んで居る妻を、我親の家へ迎へ取る式であつたと想像せられるのである。玉葉(建久二年六月二日(4)條)には、迎婦の儀といふ語が用ゐてある。中古妻の家で婚姻するを普通とした時代でも、其夫人はいつの間にか夫の家に入つて來て北の方となつて居る。事實嫁入は無くては濟まなかつたのである。ただそれが年取つて後か、又は新婚早々かが問題となるだけである。嫁入といふ語には、嫁を夫の家へ連れて來るといふより以上の意味は含まれて居なかつた。又今日でも嫁入が結婚よりずつと後れて、行はれて居る例は諸處にある。島根縣簸川郡の西濱では、子供が生れてから其子を抱いて嫁入の式をするのが珍しからず、長崎縣西彼杵郡の太田和村でも、嫁入と誕生祝とは同じ日に行ふを普通としてゐる。つまり女房は尙暫らくの間、親の里に留つて居たのである。さういふ習慣はよく見ると都會でも折々見かける。

デアヒ

出合ひといふ簡便な婚姻式が、近年都會の地で採用せられる迄は、嫁入は當日嫁

双方の家に於て、兩度に行はるゝ祝ひの儀式であつた。出合ひは即ちこの二つの手續きを併合して、時間を省かうとする新たなる便法であつて、其名前も告別式などよりは遙かに感じがよい。

ヨメジョイハヒ 長崎縣西彼杵郡江ノ島では嫁入祝儀を、單にかく呼んで居る(婚)。

ヨメドリ 嫁入は單に嫁女の家から謂ふ語であつて、近畿中國では普通に之を嫁取りと謂つて居る。是は聲方の儀式の嫁方に比して、次第に重々しくなうとする傾向と伴ふものらしい。或は又ヨメムカへと謂ふ土地もあつた。

コシムカヘ 江戸では古く奥迎へといふ語もあつたが、今日はもう使ふ人は少ないかと思はれる。奥は嫁の乗物のことだが、奥に乗つて嫁入することもさう古い習慣では無かつた。嫁方では之に對して奥入れといふ言葉もあり、或は其中間から見たヒキウツリといふ語も尙行はれて居る。

ムカサリ 又ムカサレ。「迎へられ」の方言である。嫁入は祝言又は婚禮と謂つても通ずるが東北は一般に之をムカサリと呼んで居り、又縁づくことをムカーサルと謂ふ。此語の及ぶ所は信州から駿河伊豆、すつと飛離れて宮崎縣の南部でも、嫁入することをムカサルと謂つて居り、種子島ではムカーラツテユクとも謂ふ。

ゴゼムカへ その種子島では奥迎へをゴゼムカー、九州の南半は一般にゴゼムカへと謂ひ、鹿兒島縣では又ゴゼンケ、或は誤つてゴジュンケといふ人もある。熊本縣では阿蘇神社初春の田作り神事に、神が姫神を迎へたまふ儀式があつて、俗に之を御前迎へと呼んで居り、此式の終るまでは、一般婦女の結婚を禁止した(阿蘇面影)。ゴゼは亭主が女房をワゴゼとも謂つたやうに、元は妻を意味する敬稱であつたらしい。八丈の島でも情を通ずることをカタルともゴゼニナルとも謂つて居た。

オメモレ 鹿兒島縣十島村寶島では婚禮のことをかく呼んでゐる(婚)。「思め貰れ」と解して居るが、御前貰れであつて、第二章に述べる熊本縣のオミヤモツと同じ意味である。

ウツカタモレ 薩摩揖宿郡では、貰ひ方ではオメモレ以外にかく謂ひ、呉れ方では種子島の如く迎へられて行くと謂つて居る。そして祝儀は一般にゴゼンケである。

オカタムカへ 茨城縣の北部には、今でも嫁入をオカタ迎へといふ地方がある。オカタはゴゼと同様に人の女房の敬稱であつたのが、後には我妻だけに限つていふ處もあり、或はまたオカッサマだのオッカアだのと、至極粗末に使ふ者も多くなつた。以前は大方殿などといふ漢字を宛てゝ居たから、悪い語ではないのである。

トジモレ 奄美大島では嫁の引移りを御前迎へといふ以外に、トジモレ、トジソーリ(婚)、

或はトジカメウン、トジトメウンとも謂つて居る。トジは刀自即ち主婦のことであつた。トメル、カメルは得る意、ソーリは添ひであらう。

ネビキ 沖縄では嫁引移りをニービチと謂つて居る。奄美大島にはネビキイハヒといふさうだから、是も根引きもしくは妻引きあつたらうと思ふ。大島にはトジカメウン、其他の語があるから、爰でも嫁入と婚姻とは二つのものであつた。

ブリニイビチ 沖縄本島の金武字金武並里に於ては、明治末期頃まで、毎年一回九月にブリニイビチといふ事が行はれ、村中あちらでもこちらでも同時に結婚式が行はれた。ブリは群の意である(南島研究第三輯)。多分收穫期との關係があらうと思ふが、それ以外に如何なる事情に由るものか、調査を深めたい。

ササギ 宮古多良間島では、婚禮をニービチ、トジトメウン、ウトムチュン(夫持つ)以外にササギとも謂ふ(婚)。

サンビヤケエ 又はサンビヤカレエ。薩摩飫島では、婚禮をヨメイと謂ふ以外にかく呼んで居る。式場で嫁が食物に手をつけぬ故に、屋外の群集が三杯食へくと囁し立てる、其語が式の名となつたものらしい。或は産部屋明けであつて、其機会を以て引移り乃至披露の宴を催したことが起原かも知れない。

シュウヤウ 安藝の安藝郡山縣郡で婚禮をさう謂ひ、備後の三原でもシュウと謂つて居る。今では無論祝言や祝儀と、同じ意味の如く解せられて居るだらうが、事によると別に起原があつて、或は出雲の簸川郡の漁村で、男女の契を結ぶことをショヤといふのと、關係のある語かもしれない。

ケイコニヤル 對島の豆^{マメ}酸^{アサ}部落では、嫁入當日も女は畑仕事に出て居り、夜になると仕事着のまゝ背負籠一つ持つて、親なり近所の人一人なりに連れられて嫁方へ行き、焼酎一升で式が終る。そしてかく嫁入らすことを嫁古にやると謂つて居る。嫁の衣類其他は皆實家に置いてあつて、入用の時は隨時取つて來、使へば又持ち歸る。衣類や日用品は皆實家で買つて呉れる。そして實家の父が死ぬと始めて荷物を婚家へ取寄せる風である(婚)。

ヒトゴニスル 三河北設樂の山間では、嫁入させることをかく呼んで居る。

ヤスナヲレ 美濃揖斐郡徳山村では、嫁に行くことをかう謂つて居るが、多分やしなはれであらうと思ふ。

テマヲカマヘル 安藝の山縣郡で嫁を貰つたり養子嫁を貰ふことを謂ふ。手間は勞力の意味である。播磨などでテツダヒヲトルと謂ふのも同じことで、嫁取りは婚姻以上に家にとつては勞力を求めることであつたからである。